

海外で育った母と子の記録（19）

i + 1（アイ・プラス・ワン）

松本 康子

バイリンガル教育のある研修会で、「言語習得のためには基本となる要素 (i) と、それにプラスした何か (+1) が必要だ」と、習いました。長女の言葉の習得を例に、我が家の「i」と「1」について考えてみます。

<言語習得>

受講した研修会で、Stephen Krashen の Natural Approach 説を習った中に、「子どもの第一言語は9才から12才までに決定する」とあり、「第一言語をしっかり習得することが第二言語の習得にも関係する」ともありました。

この研修を受けた頃は、1才半でアメリカに連れてきた長女が、すでに現地の高校を卒業した後。学術的な根拠は別にしても、長女の言葉の成長と照らし合わせてみると、何となく「そうだったのか」と納得したのです。

<我が家の+1>

我が家のプラス・ワンにあたるものは、「考えるまでもなく外では英語 (i) だから、家庭では徹底して日本語 (+1) で育てる」です。その、家庭では日本語というのも、子ども達の読み・書きが高校卒業レベルくらい出来ること、を意味しています。このことは、渡米してから早い時期に決まりました。

3年と予定していたアメリカでの生活が、それよりも長くなりそうだと分かった時のことです。ある日突然、夫から、「うちの子ども達を何語で育てるのか、真剣に考えてる?」と聞かれました。それまで当然のように、家の中での親子の会話は日本語だった、のにも関わらず。「いったい、私に何が言いたいのか?」私達夫婦のような、家庭を持った日本人留学生を身近に見てきて、子どもに日本語力がなければ、親子の会話が成り立たない。しいては、親子関係に支障をきたすだろうという将来の姿を、私の答えから簡単に想像できてしまったのです。

親しくしていたご家庭のお子さんは5才くらい。子どもは外で

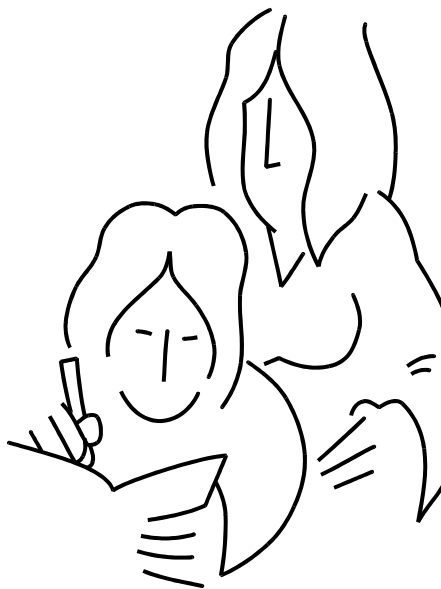
英語を浴びてきて、どんどん英語が上手になっていきます。子どもですから、自分が何語でしゃべろうと、自分が話しやすい言葉で話すことに、頓着しません。今はまだ語学力にそれほど差はないにしても、その時ですら夫の目には、ネイティブ

のようにきちんと、友人が子どもに対応できているようには、見えなかったのです。自分達夫婦の英語の上達を疑問視し、抽象的な言葉を使い始めたらと、人事ではなかったようです。

その予兆として、長女がしゃべったある語彙が、親にはまったく分からないという、ショックなことが起きました。後で知ったことですが、英語ではなく韓国語で「鍵」。

親子間で会話が成り立つ言葉として、何をどうするかを見極め、子どもに教えていけるように、親が決断しなければならぬと。それまでは、意識せずに当然のごとく「日本語」で長女と話していました。それ以後は「意識して意図的に」と、徹底したのです。結果として、子ども達に、

バイリンガルの道が開けました。



<家庭で出来ること>

私が子ども達との会話で、特に気をつけたことが3つ。まず、正しい語彙や言葉の使いの習慣づけ。子どもにとって一番のモデルは私自身ですから、日ごろから、子ども相手でも、丁寧な標準語で。次に、できるだけ長い言葉で話すこと。たとえば、塗り絵に赤い色を塗るとします。その時、ただ「赤」と言うのではなく、「ルビーのような」「夕焼けに近い」「血のような」赤と、言葉を足します。動詞についても言えます。「走る」は、「かけっこ」「スキップ」「マラソン」「疾走」などいろいろあるので、表現したい言葉に近いものを使わせます。3つ目は、会話の